各都道府県が取り組む教育改革

③ 群馬県

地域性を生かした主体的教育をめざす

国際化や情報化、さらに少子化・高齢化といった社会の変化は経済構造や政治状況だけでなく、教育の現場にもその影響を与えている。

いわば時代の転換期の中で、教育の諸問題に対応していくため、群馬県では平成8年度「群馬県教育総合計画」を策定、「人間、地球を大切にする21世紀群馬の人づくり」をテーマに社会の変化に対応した群馬の教育の推進を図っている。長期的かつ総合的な視点に立ち、新しい発想に基づいた高校教育改革とはどのようなものなのだろうか。その概要を探るため、同県教育委員会に取材した。

一つ一つの高校に特色を作る

多様な生き方や価値観が生まれ、1人ひとりの人間性が深く問われる中で、高校教育も脱偏差値、個性尊重が大きな流れとなり、学歴重視から学習歴重視へ、あるいは「教えられる学校」から「生徒が主体的に学ぶ学校」へと変化しつつある。群馬県でも社会の変化や生徒の多様化などに対応するため、特色と魅力ある高校作りを進めてきた。

「群馬県も長期に渡る生徒数減少という問題を抱えています。しかし、そういった状況を前向きに生かすとともに、多様化が進む生徒の実態に適切に対応し、社会の要請に応じた特色ある学校作りをめざそうというのが、群馬県の高校改革の基本課題です。特色ある学校・学科・コースを作ることで、学校の活性化を図ろうとしているわけです」

このように語るのは、群馬県教育委員会事務局学校教育部学校指導課の池田信明先生。

今、社会では、今後ますます予想される生徒の多様化に対応するため、生徒の興味・関心などに応じた教育課程を編成し、生徒がより主体的に学習できる環境作りが求められている。これらを背景に群馬県での高校教育改革が始まったのだ。

高校の個性を中学校に発信

平成8年度にはその第1歩として、尾瀬高校（武尊高校から校名変更）に自然環境科が、そして新田暁高校に総合学科が設置された。また、藤岡地区における学校間連携（生徒が他校に行って学ぶ）、嬬恋（つまこい）地区における中高連携も同年に始まった。

さらに9年度には国際科が2校に、国際マルチメディア科、森林科学科がそれぞれ1校で新たに設置され、10年度には、2番目の総合学科が渋川青翠高校でスタートした。これらの取り組みは今後も続けられ、福祉科、スポーツ科、芸術科などの新設が計画されているということだ。

「高校教育改革の根底に流れているのは、従来の高校教育のよさを生かしながら、生徒1人ひとりの個性を生かし、自ら学ぶ意欲を高めるような教育を進めようという意識です。また、高校教育の質的向上は、各高校がそれぞれの学校の抱える課題を自覚し、積極的に改善に向けて取り組んでいくことが不可欠です。1人ひとりの教師に改革の意識を持ってもらうことが大切です」

なぜ、この高校へ進学するのか、そしてこの高校に進学して自分はなにを学びたいのかという問いに生徒が真正面からぶつかったときに、これまでの高校のあり方では、だれにとっても容易に答えが見つかるとはいい難いのは事実だ。

「改革の目的の一つには、なぜ高校へ行くのかという問いに、まず高校の側が答えられるようになることもあります。そのためには受け入れる高校の側が、『ここに来れば、こういうことが学べます。こんな人間を育てます』ということを明確に打ち出して、それを生徒が高校について考える動機づけにできればと考えています。高校でなにを学びたいかを考える姿勢が、自己の将来に対する自覚につながると思います」

また、群馬県では生徒が目的意識を持って高校を志望することができるように、中学校への情報発信も重視している。

「例えば、各高校がインターネット上にホームページを開設して、それを中学生が自由に見ることができるようにもなりました。また、本県では平成12年度入試より、それぞれの生徒の個性や優れた点を評価するため、異なる選抜尺度に基づく多様な選抜を実施するとともに、真に行きたい学校への受験機会の複数化を図ります」

つまり、群馬県では各高校が「入学させたい生徒像」を明らかにしていき、目的意識を持った生徒を求めているというわけなのだ。

地域の力を生かした教育

さらに、群馬県の高校教育改革の特徴の一つとして、地域性を生かした教育、地元に密着した学校作りという発想が挙げられる。群馬県の環境教育の中核として設置され、全国的に注目を浴びている尾瀬高校の自然環境科は、豊かな自然を生かした教育を展開している。

「尾瀬高校の自然環境科では、群馬県独自の環境に関する専門科目を数多く設置し、尾瀬という生きた自然を題材に、自然との共生を図ることのできる人づくりを進めています。ここでは公開講座の実施などによって生徒たちが広く県民との交流を図ったり、尾瀬の自然に造詣の深い方々に講師を務めてもらったりしています。まさに『地域の教育力を生かしていこう』というわけですね。また、ほかの県からの入学者も含め、自宅から高校に通うことが困難な生徒のためには、地元の家庭にホームステイする『尾瀬ハートフルホームシステム』という制度を設けています」

つまり尾瀬高校では、尾瀬の自然を背景に環境について考える生徒の育成をめざし、高校の特色化を進めようとしているのだ。

「環境や自然保護という問題にかかわっていく人材を育てていくことは、今日では大変重要なテーマとなっています。人間と自然の共生とは、教室の中だけで学べるようなものではなく、実践的、体験的な学習が必要になってきます。尾瀬高校での成果を県下の各高校をはじめ、中学校、小学校での環境教育にも生かしていきたいと考えています」

高校の個性化という新しい試みゆえの課題ももちろんある。高校を選ぶ中学生には、これまでの「進学のための高校」「就職のための高校」といった旧態依然とした高校観が立ちふさがっている。個々の高校の個性化が、正しく評価されていくにはまだまだ難しさもあるのだ。

「しかし、社会全体が教育というものに要求するものは確実に変化していると思います。こうした社会のニーズの変化に対応し、生徒の幅広い期待にこたえていくために、高校教育が多様で、柔軟性に富んだものとなるよう質的充実に努めています。確実に教育改革は進んでいるという手ごたえはありますよ」

群馬県教育委員会事務局学校教育部学校指導課課長補佐
池田信明 Ikeda Nobuaki
地歴科の教師として17年間教壇に立ったあと、群馬県教育委員会へ。高校関係の指導主事として、入試や教育課程、教員研修などに当たってきた。群馬県の高校生については「都会的な部分と地方の素朴さと、両方がうまく混じり合っている」と感じている。

各都道府県が取り組む教育改革 ③ 群馬県

事例紹介

群馬県立尾瀬高校

尾瀬の自然を生かした教育内容で人間力を育てる

自然と共生できる人作りをテーマにした自然環境科を設置した尾瀬高校。群馬県の高校改革の中でも、特にユニークなものとして注目されている。新しい学校のあり方を模索する同校の栗原健校長先生にお話を伺った。

主体性を磨く独特の教育内容

「間違いなく、自然が大好きという生徒が集まっています。そういう意味では、学問と真剣に、しかも楽しみながら取り組む場として、自然環境科は申し分ないでしょうね」

全国に先駆けて、体験的、実践的学習を重視した自然環境科が設置されてから3年目。自分なりにテーマを持ち、目的意識をしっかり持った生徒が確実に入学していると語る栗原校長。文化祭などでも、教師にいわれる前に自分から積極的に動き、興味あるテーマに沿って自分で調べまとめあげる姿に、新しい尾瀬高生像を見るという。

群馬県立尾瀬高校校長
栗原　健 Kurihara Satoshi

尾瀬高校は普通科、経営情報科、自然環境科各40人という小規模な高校。そこへ今年度から校長として赴任。前の8年間は教育委員会で高校改革に携わってきたこともあり、高校教育への意欲は大きい。

自然環境科の立ち上げに際しては、科目内容に関して校内・外で入念に検討が重ねられた。尾瀬の自然を理系文系両面から学ぶ「総合尾瀬」や、自然を科学的手法によって観測する「環境測定」など、専門科目はかなり独特な内容である。また、自然環境棟や自然植物園など、新しい施設も充実している。

「尾瀬という地域にこだわり、しかも独自性のある科目を履修しながら、常に自然と人間の共存という普遍的なテーマに向かって拡大していく視野の広がりを忘れないところが、本校の大きな特徴でしょうね」

過渡期としての不安と模索も

自然環境科には進学志望者と就職希望者の両方がいるので、それぞれに対して、きめ細かい進路指導が必要になってくる。自然環境への意欲があって入ってきても、具体的な進路となると、これから決めるという生徒も少なくない。今後、自然環境という学問分野の幅広さ、そして実体験を基に学び、考え、判断するという3年間で身につけた力を生かしながら、教師と生徒がいっしょに切り開いていくことになるだろう。

「ただ、進学か就職かというのはあくまでも『結果』に過ぎません。大切なのは豊かな自然の中での体験学習などを通して、主体的に学ぶ姿勢、問題発見・解決能力を身につけること、すなわち『人間力』を養成することです」

他学科の授業も自由に選べる総合選択制、ゼミナール形式による少人数指導の実施、そして県内外からの通学困難な生徒を中心に、地域の一般家庭にホームステイして高校に通う尾瀬ハートフルホームシステムなど、従来の学校教育を補完し、豊かな人間教育につなげていく取り組みは数多い。

「3年間の教育の充実とは別に、卒業後の進路に関しては不安な声があるのも事実です。来年、最初の卒業生が巣立つわけですが、世間から大きな注目が集まっているのは自覚しています」

新学科1期生となる3年生は、大学進学をめざす環境科学コースに15人、自治体や環境関連の企業への就職志望者を対象にする自然環境コースに18人。改革に取り組む尾瀬高校の評価が定まってくるのはこれからだ。